

科学的命題は認識的に正当化されるか？

岸哲生

大阪大学人間科学研究科

自然科学の歴史は誤りの歴史だった。フロギストンやエーテルは歴史上の一定の期間にわたって、人類の知識の一部とみなされていたが、現代では誤りの多い仮説の中での存在に過ぎないとみなされている。では、現代の科学理論における素粒子や重力場もまた、未来の人々にとっては幻の存在にすぎないのだろうか。

デュエム＝クワインのテーゼは、競合する複数の科学理論の中からどの理論が正しいかを決定する実験（決定実験）は不可能であるというテーゼである。このテーゼによれば、電子や重力場といった理論語が指し示す対象が実在することを実験によって検証することは不可能であることになる。

このテーゼが含意する内容は様々に解釈できるが、一つの解釈は、実験によって検証されてきた現代の科学理論は、我々にとって信じるに値しない理論であるという解釈である。本発表ではこの見解に反論し、決定実験が不可能であることを認めつつも、科学理論を受け入れることが認識的に正当であると主張する。

そのために本発表では、認識論における認識的正当化の理論を参照する。特に、21 世紀に始まった潮流である知識第一主義認識論では、認識的正当化は知識概念の観点から分析されてきた。たとえば Rosenkranz (2018) では、

($\neg K \neg K$) ある命題 p が認識主体 S に対して正当化されているのは、認識主体 S がその命題を知る立場にないことを知る立場にない場合であり、その場合に限る

と分析される。Rosenkranz は「命題 p が認識主体 S に対して正当化されている」および「認識主体 S が命題 p を知る立場にある」という命題を様相演算子 J および K を用いてそれぞれ「 Jp 」「 Kp 」と表現し、

$$Jp \leftrightarrow \neg K \neg Kp$$

と分析した。

本発表では、この（一K一K）理論を参照しつつ、科学理論の認識的正当化を議論する。

引用文献

Rosenkranz, S. (2018). The structure of justification. *Mind*, 127(506), 309-338.